

山川〔健次郎〕先生

桑木彥雄

—

明治十年代の我国の学界には初めに数学会社、数学協会などの学会があり、次いで、理学協会、又東京数学物理学会が創始せられた。その何れにも会員として、山川先生の名を見出すのであるが、当初はなお旧時の和算家出の洋算家も多数あり、其他新旧の思想が雑然としていた事は雑誌の記事等にもあらわれていた。明治十九年出版の東京数学物理学会記事に、山川先生が同会委員長としての任期一年間の事務報告があるが（此学会には創立以来会長を置かない）其中に某氏が老齢で退会したるにつき之を名誉会員に推薦すべきや否の投票の結果、可票多数であったが定数に達せず否決になったことを報告し、その少数の否を投じた一人としての先生の辯に、この学会の名誉会員は独逸ドイツならばヘルムホルツ、英ならばケルヴィンの如き人でなければならぬ、単に会の功労者の故で推薦するは不可であると述べられている。學術本位の説を高唱せられたものと思われる。同じ雑誌に先生の「毛管現象の測定」という研究報告がある。後に余等にも実験の題目として課せられたものである。又其頃数学及物理学の述語訳語の制定が会の一の大なる事業であり、先生はその特別委員会の終始を通して働かれたようであるが、人も知るように此学会の訳語には、ひずみ、しぶとさ、マダ、グネ、つけなど、特異な言葉使いがあるが、今、基礎基礎づけるなどという言葉が普通に用いらるる根源が以上のに

在ることは云うまでもない。これらの訳語が誰々によつて発案されたかは詳つまびらかにしないが、山川先生が嘗かつて語られた中に、この訳語委員会で最も苦心したのは同音異義を避けることに在つたと云われたことがある。先生は古き羅馬ローマ字論者で、又嘗かつて中学校漢文全廢論を唱えられたこともあつた（明治三十五年教育時論）。又明治二十四年我国度量衡法の一大変革に先生と菊池大麓先生とが盡力せられたことは周知の事実であり、又先生が晩酌をグラムで制限せられていたことも有名である。

明治二十年代には菊池、寺尾、箕作、矢田部諸博士の中等教育教科書が出版されていたが、其頃の東洋学芸雑誌で見ると文部省は先生に箕作、矢田部二博士の動物植物に於ける如き物理通解の著を依頼したようであつたが、先生は遂に之を著述せられなかつた。

先生が理科大学紀要へ掲載された研究論文（明治二十一年）は大理石の熱伝導率に関するもので、某外国教師が本邦産大理石について之を測定し異常に大なる値を見出したのを再吟味せられたもので、其結果はウィンケルマンのハンドブック・デア・フィジークにも載録してある。この実験測定は当時化学科の学生池田菊苗、小川正孝二博士が行われた。この論文も前記の毛管現象のも数学的理論を含んだものである。大学の物理学の講義では先生は早くから光学を担任せられていたようであるが私が明治三十年九月から翌年九月まで物理学科二年生として先生の講義を聞いたのは光学と熱力学と毛管現象論等で、光学は主にヴェルデー、熱力学はポアンカレ、毛管論はノイマンの著書等に依つて講ぜられ、廻折論には特にロンメル等のベッセル函数を用いたものの詳細な講義があつた。先生の講義は極めて周密であつたので筆記もよくとれた。ただ時に、先生が帰郷された後には特に会津辯が多く出るとの評判もあつた、又後には餘り目立たなかつたが、その頃学生たちが噂し合い、先輩からも屢々聞しばしばいたのは、先生が話の間に何かの折にちよつと肩を聳かす風があつ

たことで、始めば其意味を解しなかつたが、それが英語の所謂シュラッグ (shugg) であった。先生は十五六歳から二十二三歳までの感受性の強い時代を外国で過したのであるから、自ら其挙動おのずかに外国的などころも浸染したのである。併しかし固もとより先生の本来の国粹主義は少年時の在外中にも著しかつたさうである。

又先生の学問上に於ける見識を示す一例としては、明治二十二年、先生が東京物理学校卒業式に於ける演説 (同年の学芸雑誌所載) に物理学を学ぶものの、心得を説き、最後に、或人が歌を学ぶ要訣を或国学者に問いたるに、先ず源氏物語を読めと答えられ、源氏の次に何を讀むべきかの問に、次も源氏、其次も源氏と答えられたという話があるが、物理学を修むるには、一に数学、二に数学、三に数学、とその演説を結ばれた。約三十年後の一九一五年レントゲン線の発見者レントゲンの七十回誕辰に、ゾンマーフェルド教授の祝辞 (同年のフィジカリシエ・ツァイトシュリフト所載) の中にレントゲンが、物理学の学生に必要な準備が三通り (トライ・エルライ) ある、「数学、数学及び数学」と云つたということが記してある、言い表わし方が餘りに吻合ふんじうしているので、いつか之について先生に語らんと思いつつ遂に果さなかつた。

そのレントゲンとの奇縁ともいふべきは、一八九五年即明治二十八年レントゲン線の発見の直後に於て先生は其実験を繰返そうと不完全な設備で当時の助教授鶴田賢次博士と共に苦心の後之に成功せられ医学会等で供覽せしめられたことは当時の学芸雑誌等に記されてある。又その程度は詳まひらかにしないが、当時の助手水木友次郎氏の語る所に依れば、先生はこのときレントゲン線の結晶体透過の実験を試みられたさうである。若もし條件が具備したならば偶然にでもラウエを先見したことになるかも知れなかつたのである。

明治三十四年先生大学在職二十五年の祝賀会が小石川植物園で催された。大学教授の就任には先生より先任者も数氏あつたが、その転職等で在職二十五年は先生を始めとし、二十五年祝賀会は爾後例となつた。記

念としては先生の省像油画一面を大学に寄附したと名簿を先生に呈したとと植物園の宴会とだけに止まったようである。其時田中館先生の読まれた祝辞中に、先生の人物を以て政界に在れば夙に大臣たり宰相たるべしという如き文句もあつたようであつた。このとき先生の謝辞は意外に長きものであり（この分ならば速記させて置くのであつたと発起人の一人藤澤先生が云われたように記憶する）一首の歌を詠じて結ばれた。先生はこの後、間もなく大学総長となられた、この時分、先生は、夏期になると顔面の皮膚病に悩まされ、休暇は大抵箱根の蘆の湯で過された。併し七月の卒業式に行幸の場合には、白布で顔面を包んで大学の一室に閉籠とじこもつて諸般の指図をして居られたことも思出らるる。

明治専門学校に総裁として屢しばしば学生に訓話されたが、訓話には豫あらかじめ草稿があり、之を手にして殆ど朗読されたが、いつも前置き等はなく直にエッセンスに入り感銘の深いものであつた。京都大学に關係されたのは短かい間であつたが、その間に割合に多くの教授と接近せられ、研究費の支出等には特に盡力せられたと文科の一教授に聞いたことがある。九州大学に在られたとき病院の看護婦寄宿舎の集會室のために院長からの扁額を乞われ先生は「一に看病、二に薬」と書かれ、又「油断大敵」と題して蜘蛛の集からすてんぐに烏天狗がかかつている画を画かしめられたと聞く（その物は火災で失われたが、その写真を久保博士が蔵せられるという）。明治四十四年同大学工科の創立のとき、先生の意見で新例を開いて、工科の中に理科的な、数学及力学、物理学、化学の三講座を先ず設けしめられ、数学、力学の講義を私に命ぜられたが、その講義案について長岡先生の意見を尋ねられ、先生も亦意見を述べて、書面で私に之を示された。

以上は略ほぼ日本物理学の父としての専制の片影を思出のままに綴つたのであるが、先生に親炙しんじやした印象は、先生は一面常にやはり科学者であり、合理的に凡すべての事物を独断的でなく周到に觀察する風があり、彼の千

里眼事件で丸亀に赴かれたのなども無論信を措かず、然かもその実験の煩を厭われなかつたのである。又不合理的な旧習を打破するというに於て先生はいつも進歩的であつたと思う。

（昭和六年八月、「教化運動」山川先生追悼号）

二

山川先生は九大の初代の総長として、創立以来二ケ年許り在任せられた。

先生は我国で明治二十年代に初めて学位令が出たときの最初の理学博士である。会津藩士としての先生の経歴は敢て云うまでもなく有名であるが、明治の初めに渡米してエール大学に学び、帰朝せられてから、東京大学創立と共に其教授となられ、明治三十四年には先生の東京大学在職二十五年祝賀会が門弟友人で催された。東大創立当時の教授で其頃生存して居られた人々も尚他に何人かあつたが、皆其間に退職又は転任せられていたので、日本で大学教授在職二十五年を祝つたのは先生が最初であつた。

そのとき記念に先生の省像油画一面が川村清雄画伯の筆で出来た。今東大の物理教室に掲げてある。川村画伯は勝海舟の何かに当るといふ純江戸ツ子で明治年代先進洋画家の一人である。画伯は何度か教室へ通つて先生を描いていたが、或日画伯の曰く、つくづく先生の御顔を拝見していますが先生はまことに美男でいらつしやる、と此の言葉が、画伯の応待をして居られた当時のN助教授から伝えられて、平生先生をこわがつてばかりいた教室の人々を大に賑わしたこともあつた（当時私は教室の助手であつた）。先生の眼の大きいことはよく省像画などで見る西郷隆盛の様で、然しあんなに太つてはいられなかつたが、丈が高く、大柄であられた。此の油画では頬などにも紅味があり、四十五六歳の頃の先生のまだ若々しい姿が見られる。

翌年先生は東大の総長となられ名総長とうたわれたが、学生に対する訓示に、世間の風潮の頽廢を慨かれ

「上は相公より」とか云われ、大に物議を生じたが先生強硬に其辞を改められなかつたなど云うこともあつた。有名な七博士事件の後に退職せられ、丁度設立された戸畑の明専の総裁に招かれ、ついで九大創立と共に初代の総長として来任せられたのである。

其頃は九大も学部が二つだけで創立早々、総長決裁事項も東大の十分一にも足らなかつたそうで、東京と同じ俸給を頂戴するのは勿体ない話だ、と先生が飾り気なく云われた。

先生の九大来任より少し前に丸亀其他で千里眼という一時世を騒がせた事件があつた。先生は態々丸亀へ其の真偽の調査に赴かれた。物理学者たる本領を発揮せられたに過ぎず千里眼退治などいう兎角の世評の如きは意に介せられなかつた。九大在任中にも門司に某という人の透視が世間の評判になつた。先生は其研究を發議され、医学部の某々教授と共に私も呼ばれて相談に及ばれた。然しそのうちに透視の噂も已んだので其話は其儘になつた。

九大在任二年の後、再び東大の総長として転任せられ、一時京大総長を兼ねられ、枢府に入られてから、ロンドン会議問題を先生最後の場面として、そのじき後に病を得られ、高齢ではあられたが、まだまだ元気であられたのに惜しくも長逝せられた。今年は夫れから五年目になる。

再度東大総長在任中に、内規ではあるが総長選挙制を断行され、東大最初の選挙総長となられた。

又其後、彼の森戸氏事件があり、細心熟慮其方針は一決せられたが、其間大学の立場を擁護するに人の知らない苦心をされたそうである。

先生を評するものは皆、先生の忠君愛国の至情、廉潔謹嚴、真に国士、古武士の風格あることを讚美する。先生の喜壽の祝に、先生が校長となって居られた武蔵高校から先生に贈つた、齋藤素巖作の、先生が和服で

袴はかまを着けた坐像がある。云わば先生が老来益ますます骨張こせつて見えられる姿を写したもので、先生も気に入られたと見えて態々わざわざ箱を払はらつて見せられたこともあり、よく先生の風格を現わした傑作である。

然しかし所謂いわゆる古武士の様なという半面には頑固一徹という印象を伴なわなくてもない。先生も其操守すじぎに於て頗すこぶる厳いひであられたが、先生の頑固には丁髷ちやんまげ式の頑固は全く見出されなかつた。極めて合理主義的で、却かえつて、頗すこぶる開けた、進歩的な先生として先生に親炙しんしやした人々からは仰がれていた。

近頃何かの雑誌に、山川先生も居なくなられて、腹の切り用様を知っている教育家もなくなつたと書いてあつたが、誠に先生の傑すくれた一面はそこにも在つたようであるが、同時に先生は又嘗かつて、日本では忠義の為に死んだというような人は沢山あるが、真理の為に死んだという人はまだ聞かないようだ、と云われたことがある。深く考うべき言葉だと思つた。先生に関する語り草は容易に盡きないが、紙数も既に盡きたから、他は他日に譲ることとする。

(昭和十二年、九州帝大新聞、九大創立二十五周年纪念号)

- 桑木或雄著『科学史考』（河出書房、昭和一九年）所収。
- 読みやすさのために、旧漢字は新漢字に、旧かなは新かなに変更し、適宜振り仮名をつけた。ただし、一部の漢字は旧漢字のままにした。
- PDF化にはL^AT_EX_{2 ϵ} でタイプセッティングを行い、dvi_{ps}dfmxを使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、
「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。